

## 諸国に独立への希望を与えた日本海海戦（第一回）

講師 一龍斎貞花

今年、日本海海戦一〇周年でもあります。日露の戦いは、欧米列強に植民地とされていたアジア、アフリカ諸国に、独立への希望と自信を与えた意義ある戦いでした。

一九世紀の末、帝政ロシアは強大な軍事力で中国東北部満州に軍を進め、旅順に大艦隊を配備、更に朝鮮半島への進出を図り、その脅威は日本にも迫っていた。

明治二年二月十一日、大日本帝国憲法公布。大国ロシアよりも早く、アジア最初の立憲君主国となり、翌三十二年十月教育勅語が発せられるなど国の形を整え、明治維新から欧米先進国に追いつくことを目指すものの、工業化

への進展は思うようにはかどらず、発展途上の弱小国にしかすぎなかった。

そんな中、明治二十七年八月一日に勃発した日清戦争は九ヶ月足らずで日本の勝利となり、清から朝鮮を独立させました。清というのは満州で、中国を侵略し三百年間も治めていた。中国四千年とはいうものの、元は蒙古、清は満州。中国は統治されていたんです。

日本は朝鮮を独立させ、遼東半島と台湾を譲り受け、賠償金を得て講和条約が締結されたものの、遼東半島を清に返せというロシア、ドイツ、フランスによる三国干渉。この三ヶ国に対抗する力なく、折角得た領土をわずか六日後放棄せざるを得ませんでした。

日本如き有色人種の小国が、新たな

領土を得ることを許せなかったのです。

満州や朝鮮を我が物にせんとするロシアは、旅順を含む遼東半島をなんとかしても手に入れたく三年後、力にものをいわせ旅順と大連を清から租借することに成功し、要塞を築き艦隊を配備。ドイツは青島、イギリスは香港、フランスは上海と租借しまくったのです。

国民は「臥薪嘗胆」を合言葉に、ロシアに備えるには軍備増強の声が高まっていたいき、日本国民は一丸となって協力を惜しみませんでした。

明治三十六年十二月風雲急を告げ、日本海軍は、ロシア艦隊に対抗するべく最新の軍艦を揃え連合艦隊を編成。

山本権兵衛海軍大臣は、司令長官に東郷平八郎中将を任命。

東郷平八郎連合艦隊司令長官

「舞鶴鎮守府長官で、小柄な東郷など」という批判の声が明治天皇のお耳にまで達し、東郷任命の理由をただされるや

「東郷は、運のよい男ですから起用しました」とお答えしたが、以前各司令官に国際情勢や、ロシアに対する海軍の作戦方針について諮問した時、東郷中将の具体的かつ合理的な答申が群を抜いており、抜擢を決めたのです。

薩摩出身の東郷は、薩英戦争に参加、見習い士官として第一歩を踏み出し、七年間の英国留学をへて海軍少佐として日清戦争に浪速（なにわ）艦長として活躍。

慎重かつ決断力に富み勉強熱心で、英国留学中行動力抜群と称されました。

朝鮮半島は、日本の安全保障に重要地域。目に余るロシアの野望に、明治三十七年二月遂に戦いの火ぶたが切つて落とされました。ポポン

ロシア艦隊は旅順を出てウラジオスツク目指して日本海突破を計画。連合艦隊は旅順に急行。敵の旗艦に砲撃、航行不能におちいらせたものの、旗艦三笠も集中砲撃を受け死者三三名、負傷者八三名の大被害。三笠は明治三五年日英同盟から最高の技術を駆使して英国で建造され、当時の国の予算の五%千二〇〇万円。全長一二二m、乗員の定員は当時世界の戦艦最大の八六〇人。しかしこうした敵弾集中の中、東郷長官はかすり傷一つ負うことなくやはり運の強い男であったのでしよう。

海軍きつての戦略家とうたわれる秋山真之<sup>まゆゆ</sup>の参謀が、円戦法を改良したT字戦法を考案。一直線に進んでくる敵艦隊に対し横一列に味方艦隊を並べ敵の進路をさえぎって、すべての大砲を敵の先頭に集中攻撃し順々に敵艦を一隻づつ沈めて全滅させる作戦。

ところが黄海海戦に敵の一万メートル先でターン。ターンが早すぎたのかT字戦法完成前に、敵は進路を反対にとり旅順港に逃げ戻られてしまった。

おびき出して攻撃しようとしたが、すぐ逃げ込んでしまう。さればと港の入口約九〇mに船を沈める閉塞作戦、しかし失敗。ロシアは旅順やウラジオスツクに戦艦七隻はじめ強力な艦隊を配備し、日本の輸送船はわずか三ヶ月間に十三隻も沈められてしまった。

更に連合艦隊をふるえ上らせる情報。ヨーロッパのバルト海にいる戦艦八隻を主力に、三〇隻余りのバルチック艦隊を援軍として日本海へ送るというのです。

### 戦艦バルチック艦隊

ロシアの軍港リバウを出航し地球を半周する、これほどの大艦隊の航海は史上初。旅順の七隻に八隻が合体すれば合計十五隻、六隻の日本の倍以上、海戦は戦艦の数と数。大艦隊が来る前になんとしても旅順艦隊を壊滅しなければいけない。陸海協同で攻略を

と、乃木希典大將率いる第三陸軍は旅順要塞を攻撃するも、堅固な要塞と機関銃にはばまれ攻略出来ず、されば

と二〇三高地を力攻めしたが、日本兵はバタバタ倒され多くの死者を出すも、遂に攻め落とし陥落させた二〇三高地から眼下の旅順港内の艦隊を砲撃し次々と撃沈海底に葬り、陸軍の多大な犠牲によつて見事実を結んだのです。

乃木大將は多くの兵を戦死させた凡將との評があるが、息子二人を戦死させながら悲しみを押え戦った。旅順は本当に真下、なんとしても攻略しなければいけない重要拠点でした。

呉<sup>くれ</sup>より帰京した東郷大將は、山本大臣、伊東軍令部長に伴なわれて皇居へ。この時東郷は、明治天皇に

「新しく来るバルチック艦隊を、誓つて激滅します」

断言していいのかと、山本・伊東の両名驚天したと申します。

確固たる決意表明と申せましょう。三笠は集中砲火を浴び、装甲も大砲も機械も破損し昼夜兼行で修理。

東郷長官は、自宅で休養わずか三日のみ、作戦会議、幕僚人事と精力的に

活動。

明治三十八年二月、新装なった三笠は大將旗をはためかせ、東郷長官、後に首相となる新任の加藤友三郎参謀長、秋山作戦参謀以下、呉を出発。艦隊の根拠地朝鮮の鎮海湾へ。三笠、敷島、朝日、富士の戦艦四隻、巡洋艦八隻は黄海海戦で敵に逃げられたT字戦法の失敗を繰り返さないよう全艦隊が迅速にターンする練習や、砲撃の命中率を高めるための厳しい訓練を実施。

三ヶ月間、朝五時から夜八時まで訓練を続け、現在と違い百発撃つてわずか三発という三%だった命中率が倍以上に上り、かくしてすべての準備を整え、バルチック艦隊来たと待ち構えた。ところが、バン・フォン湾を出港したロシア艦隊の情報が全く途絶えてしまい、その行動がようとして分らない。

今なら衛星や、レーダーなどで一目分るが、当時のこといつくるか、ウラジオへのルートを通るのか。

「天気晴朗なれども波高し」植民地と なっている諸国に、独立への希望を与えた勝利への東郷ターンは、次回のお楽しみに。ポポン